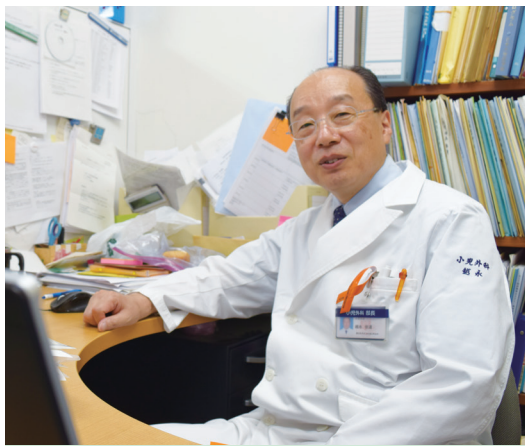


越永 従道 教授

医学部

小児がんの新たな治療法開発に取り組む

全国で年間数例しかない両側性腎芽腫 片側腎摘出に潜む腎不全発症の可能性



越永 従道(こしなが・つぐみち)

昭和58年本学医学部医学科卒。63年大学院医学研究科博士課程外科学(I)修了。医学博士。研究分野は小児科学、小児外科学、胎児・新生児医学。日本小児血液・がん学会ほか複数の学会で評議員に名を連ね、平成27年6月、日本小児外科学会副理事長に就任。現・本学医学部小児外科教授、附属板橋病院小児外科部長。東京都出身。59歳。

小児外科とは脳脊髄、眼、耳鼻咽喉、心臓大血管などを除く「小児外科疾患を扱う診療科」のこと。例えば虫垂炎など、成人してからでも発症する病気の場合は15歳以下が対象患者となるが、「小児特有の外科疾患」であれば、成人でも診療の対象となる。

医学部の助手時代は、主に成人の胆道系疾患の臨床や研究に携わっていた越永教授だが、平成4年12月に附属板橋病院の小児外科病棟医長に就任。その後、半年間の出向を挟んで6年6月に同職へ復帰して以降は、今日まで小児外科一筋に歩んできた。

12年11月から半年間カトリック大学(サンフランシスコ)に留学して胎児外科を学び、低出生体重児(1500g未満)の外科的研究に取り組んだ。板橋病院に総合周産期母子医療センターが設置されてからは低出生体重児の外科症例も増え、その臨床研究の過程で「特発性限局性腸管穿孔が低出生体重児に多く、腸管拡張を伴いやすい」ことを初めて学会に報告している。

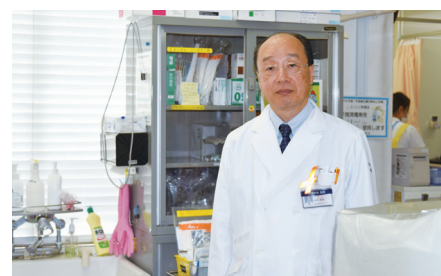
「小児がんには白血病、リンパ腫などの血液がんや神経芽腫、肝芽腫、腎芽腫(ウィルムス腫瘍)などの固形がんの二つがあります。以前は研究機関が分かれていたが、平成25年に特定非営利活動法人として小児がんの研究グループが設立されて、現在はオランダで統一されています」

「理屈でいえば、正常な組織をなるべく多く残した方がいいわけで、だから腎臓は両方残したまま、化学療法——即ち抗がん剤で腫瘍を叩いて、小さくしてから切除する方法(腎温存外科手術)を推奨している。欧米ではすでに行われていますが、日本ではまだ標準治療には至っていない。5年で目途を立てたいと考

「既存療法に闘いを挑む」

「医学の研究には基礎研究と臨床研究がありま

「小児がんの縮小



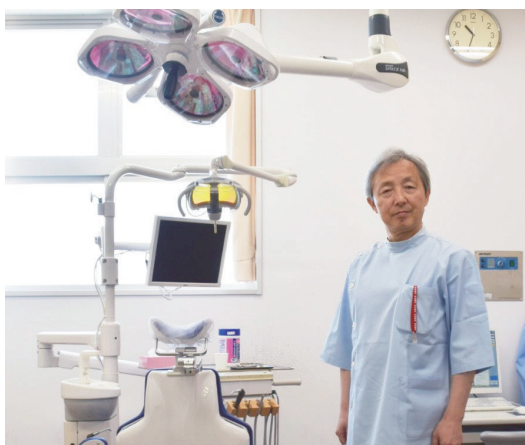
板橋病院の外来診察室にて。研究活動の合間、精力的に患者と向き合っている

近藤 壽郎 教授

松戸歯学部

国民医療に貢献する顎顔面外科学講座

「顎骨の骨接合」「顎関節外科」による機能回復を目指す 臨床にフィードバックできる研究成果を追究



近藤 壽郎(こんどう・としろう)

昭和55年鶴見大学歯学部卒。60年同大学大学院歯学研究科博士課程修了。博士(歯学)。鶴見大学歯学部講師、横浜労災病院歯科口腔外科部長、鶴見大学歯学部助教授を経て、平成15年本学松戸歯学部に教授として着任。松戸歯学部付属病院口腔外科科長。研究分野は、口腔外科学、顎顔面外科学。(公社)日本口腔外科学会理事。東京都出身。60歳。

2005年4月、近藤壽郎教授の下に開講された「顎顔面外科学講座」。顎顔面外科とは、歯科医学における外科分野である。わかりやすくいえば、主に目の下から顎の下までの部位の外科を指す。

顎関節外科とは、顎骨の骨接合と顎関節外科です。まず、前者。例えば、骨折した顎骨を元通りにするためには金属のプレートやスクリュー(ネジ)で強固に固定しなければならぬ。これを組織内副子固定という。この内固定材料の開発は20世紀半ばから始まり、現在ではAO骨接合法として一般化し、整形外科外傷、脊椎、脳神経、頭蓋顎顔面などの領域において幅広く活用されている。実は、近藤教授はAOCMF(Cranio-Maxillo-Facial)の教育、研究を統括する日本支部の中心メンバーとしても活動しており、現在は会長に就任。この分野の牽引役でもあるのだ。

顎関節外科に「さらに顎関節外科においては、顎関節疾患に關連する炎症病態を分子生物学的に解析することを目指す」として、ヒト培養顎関節滑膜細胞系を用いて検討を行っています。すなわち、炎症状態下で発現変動する遺伝子群を網羅的に解析するという研究です。この取り組みは、顎関節内障や変形性顎関節症をはじめとする顎関節疾患の病態解明に貢献するものと考えています」

顎顔面は、ものを噛んで、食べるというヒトが生きていく上で最上の喜びを感じさせてくれる複合臓器だ。「研究の最先端を走ることは大事。しかし一方で、我々には臨床医として患者を診るという任務がある。したがって、臨床から生じる『なぜ?』という疑問を、常に研究というベンチに移し、そしてまた臨床にフィードバックしていくというアプライドサイエンスこそが我々に課された任務なのです」。近藤教授の取り組みは、まさに臨床と研究との好循環なのである。

「なかでも私たちがとくに注力している領域は、顎骨の骨接合と顎関節外科です。まず、前者。例えば、骨折した顎骨を元通りにするためには金属のプレートやスクリュー(ネジ)で強固に固定しなければならぬ。これを組織内副子固定という。この内固定材料の開発は20世紀半ばから始まり、現在ではAO骨接合法として一般化し、整形外科外傷、脊椎、脳神経、頭蓋顎顔面などの領域において幅広く活用されている。実は、近藤教授はAOCMF(Cranio-Maxillo-Facial)の教育、研究を統括する日本支部の中心メンバーとしても活動しており、現在は会長に就任。この分野の牽引役でもあるのだ。」

顎関節外科に「さらに顎関節外科においては、顎関節疾患に關連する炎症病態を分子生物学的に解析することを目指す」として、ヒト培養顎関節滑膜細胞系を用いて検討を行っています。すなわち、炎症状態下で発現変動する遺伝子群を網羅的に解析するという研究です。この取り組みは、顎関節内障や変形性顎関節症をはじめとする顎関節疾患の病態解明に貢献するものと考えています」

顎顔面は、ものを噛んで、食べるというヒトが生きていく上で最上の喜びを感じさせてくれる複合臓器だ。「研究の最先端を走ることは大事。しかし一方で、我々には臨床医として患者を診るという任務がある。したがって、臨床から生じる『なぜ?』という疑問を、常に研究というベンチに移し、そしてまた臨床にフィードバックしていくというアプライドサイエンスこそが我々に課された任務なのです」。近藤教授の取り組みは、まさに臨床と研究との好循環なのである。

顎関節外科に「さらに顎関節外科においては、顎関節疾患に關連する炎症病態を分子生物学的に解析することを目指す」として、ヒト培養顎関節滑膜細胞系を用いて検討を行っています。すなわち、炎症状態下で発現変動する遺伝子群を網羅的に解析するという研究です。この取り組みは、顎関節内障や変形性顎関節症をはじめとする顎関節疾患の病態解明に貢献するものと考えています」



今後も顎顔面外科学の領域の発展に寄与し、患者に尽くしたいという近藤教授

また、組織工学を用いた再生医療の研究にも余念がない。「安全で豊富に入手できる幹細胞の確保には問題が残っています。しかし、廃棄される組織から再生医療に転用可能な細胞を採取できるのであれば、患者の身体的負担を軽減することができます。例えば、親知らず(埋伏歯)は、炎症の

表裏一体の臨床と研究